

〔基調報告〕

## マイノリティの人口学

石 南 國

人口の歴史は、移動の歴史であるともいえます。有史以来人類は、マルサスの人口原理にしたがって過剰人口問題に、反復的に直面しては、これを克服したりして人口の波を描きながら、今日まで発展・増大してきました。

人類は、増加して生活空間の限界に直面したとき、これを克服する方途として、まず人口の場所的移動をしてきました。旧約聖書によると、多分27万年前ともいわれるアダムとイブの子たち、兄のカインが弟のアベルを土地をめぐる争いで殺人を犯したのは人口問題発現のはじまりであり、生存競争のはじまりでもありました。

以後人類は、新たなる土地、より広い、より肥沃なる土地を求めてきました。歴史的には4~6世紀のゲルマン民族の大移動が過剰人口問題を解消する主たる方途でありました。このほかに武力をもって生活空間を獲得・奪取する方途もありました。古代のギリシャ・ローマ時代にみられたものがそれであります。

15世紀末の新大陸発見による大航海時代のヨーロッパからアメリカへの大移動は、結果的には白人の人口爆発を未然に防ぐことになりました。第2次世界大戦後の黄色人種における途上国の人口爆発は、新たな領土がこの地球上にないということにも遠因がありました。戦後の難民から生じた人口移動は、主として東西間の政治的要因で起こり、従来の場合とは異なる様相で発展してきました。

世界の人口は、いまや60億に達し、その大部分は途上諸国の急増部分によるものであります。経済発展に比して人口急増のため、戦後これらの地域では人口抑制政策をとってきました。一方先進諸国は、第2人口転換に直面して出生力減退が進み、出生促進策を採らざるをえなくなってきました。

こういう状況のなかで、歴史的にはかなり古くから民族あるいは人種の移動からはじまり、次第に異民族・異人種の相互接触（植民地の拡大、戦争、特に戦後の冷戦・冷戦解除による民族紛争）は、プラスの効果よりはマイナスの効果ばかり顕現しているのが現状であります。今日民族問題と宗教問題とが絡んで紛争は局地から世界へ拡散していまや世界の平和と安定を脅かしております。

今日形成されている屈指の複合民族国家では、異民族・異人種の共生は、混血化の過程で同化していくなかで習俗・風習の受容は必ずしも順調ではなく、階級差との葛藤から少数民族の問題を複雑に顕在化しております。これ以外の場合でも、先住民族の衰退化のなかで、自民族の意識・顕示と同化との葛藤のなかで複雑な問題を抱えております。

少数民族は、歴史的に少数民族化していった過程の違いによって、1) 先住少数民族、2) 自律的少数民族、3) カーストの少数民族、4) 移民的少数民族、5) 政治的・宗教的難民としての少数民族等に分けられます。

少数民族の顕著な問題化は、とくに近代の国民国家の出現と民族主義の高揚のもと、少数民族が強大な民族の支配下に置かれるようになったことにはじまりました。

その後、社会主義のもとで、多民族の結集で理想的な国家づくりを目指しました。しかしこれらの社会主義諸国は、自由を求めて崩壊への道を選びました。と同時に民族・宗教紛争へと走り出しました。これは、民族特有の文化・尊厳の抑圧から開放されたいという意識の現われにほかなりません。

現存する少数民族の諸問題について、国内のエスニシティ問題を含めて、ここに設定したシンポジウムで人口学的分析・研究によるマイノリティの人口学論議を行うことを願います。

初版以来 200 年の間に、経済事情も変わり、マルサスが予想だにできなかった人口転換の現象を体験した先進地域に加えて、今日では人口問題の二極時代に直面するようになりました。過剰人口問題を抱えて人口抑制に対応している圧倒的多数の途上国と第 2 人口転換に突入して小児化・高齢化問題を抱えて出生促進策に迫られている先進国が存在するなかで、マルサスの波動人口論に帰り、その人口論に内在する本質をめぐる諸問題の認識を含めて、マイノリティの論議をここで行うことを願います。

(経博・教授)